

土木系学生諸君へ

土木系学生会

人間の社会生活の基礎作りという重責を負う土木工学は、産業の拡大に応ずる投資ないし整備の必須要件として、最近一層大きい役割りを求められている。しかも現実には土木の計画・工事がいちじるしく立遅れてとても需要についてゆけないことを私達は知っている。また現代社会はもはや技術者に対し単なる技術の切売りだけではゆるしてくれない一方、土木技術者は他の分野の人に比して多くの面で近代性を充分確立していないとの批判をしばしば耳にする。聞き流すにはあまりに重大な問題ではないだろうか。なぜなら従来どおりではもう土木技術者としての責任を果たし得ないほどに社会はどんどん歩いているのだから。この現実を厳しく自覚し、新しい社会にふさわしい近代性を身につけることは、将来を担う私達学生の当然の権利であり義務であろう。ところが私達はこの重大な問題に直面しても今までは一人きりで、ただ「何とかせねば」と焦躁するよりほかに方法がなかった。工学系の他の分野では学会の学生部などがあって活発に動いているのに、土木工学においては学生のための十分な組織も有効な活動もなく、学生同志の交流を深め、あるいはそれによって私達の問題意識を相互に高めあうことなどとても望めなかった。このような漠然とした不安の中で、私達は学生同志がその意見を交流できる機会と場所を摸索してきたのであった。ところが昨年6月、学会の学術講演連絡委員会の先生方から「学生に活動の意志があれば学会としてもできるだけ援助したい」との連絡があった。学生のための自主的な組織と積極的活動の必要を切実に感じていた私達は、渡りに舟とばかり、とりあえず左京9大学の有志が集まってこの『土木系学生会』を形成したわけである。その後後記のように各大学もち回りで企画運営してきたが、今後は規模を全国的に拡げ、学生間の親睦と意見交流の場として講演・映画・運動会・見学・懇談などの会合を推進して批判に耐えるものにしてゆきたいと考えている。この会を通じて私達は教室で学び得ないもの、個人では得られないもの、しかも未来の土木技術者として呑むしろ一般市民として要求されるかも知れない重要な自己形成を期待し、広い視野と確乎とした考えを追求するつもりである。しかし歩みを重ねるにつれてこの高遠な、ともすれば夢に終りそうな理想に近づくには、私達の能力も、東京だけという地域的な限界も大きい障壁となってき

た。もっと進んだ交流の場、あるいは“学生的”に象徴される観念的な独りよがりから脱皮するために、外からの有用な示唆も必要となってきて私達は解決の方法を求めてきた。機関紙発行すら考慮されていた矢先、学会誌の編集委員会より「学生会員の間で公けに認められた組織が責任をもってやるなら、学会誌のページを学生欄として割愛してもよい」とのお話である。私達は喜んでこのご好意を受けることにした。そうすれば土木系全学生が、より自由な交流の場を全国的に持てるし、諸先輩から吸収できる場を私達自身の手で作れるからである。

このようにこの会は有志の集まりであるから、今後組織化されても精神においては常に有志各個の自主的集合であろう。しかしもとよりこの会は学生総意の発現機関を目指すものだから、徐々に拡大発展してオーソライズされねばならない。それには全国の学友の積極的参加が必要であるし、私達がこの1ページをいただけたのもこれが大前提となっていることはいままでもない。

以上足りない舌で私達の考えのほんの一端でも伝えようと努めたが、この会が学生一人一人のものであることを理解していただければ幸である。現在の土木界の問題を解決するには、私達が“敗北主義”と“独善”を克服するより他に途はない。学生会とこの1ページもそのために有効に使いたいと私達は考えている。だから学生会も学会誌の1ページも、土木系全学生に門を開け拡げ、参加と批判を歓迎するのである。

【経過報告】私達は第1回の集會を10月17日中央大学で、映画（水の利用）、講演（林教授）、水理実験室公開などを200名の参加をえて開いた。第2回は11月20日早稲田大学で行ない、さらに並行された早稲田祭の土木展（日本の道路）に関して70名のかなりつっこんだ討論がなされ、土木系学生会の一つの方向を示したといえよう。第3回は12月4日武蔵工大で開催され、300名の参加のもとで本州一四国を結ぶ長大橋についての講演（西脇助教授）、映画（若戸大橋）を行なった。以後、第4回は東海道新幹線工事見学と試乗（東京大学企画）、第5回は大学間の野球大会（日本大学企画）が計画されている。

投稿その他の連絡先

東京都中央区日本橋箱崎町2ノ8 安藤紘三
神奈川県藤沢市羽鳥 130 高部 昇